

氏名	濱中 良
学位の種類	博士（体育学）
学位記番号	第 3 6 号
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位授与年月日	令和 6 年 3 月 2 5 日
学位論文題目	高等教育期間における教養教育としてのアダプテッド・スポーツプログラムの提案：高専でのボッチャおよびゴールボールの授業実践による体験効果の検証から
論文審査委員	主査 森 司朗 副査 金高 宏文 副査 井福 裕俊 副査 梶 ちか子

論 文 概 要

本研究では，高等教育機関における教養教育としてのアダプテッド・スポーツプログラムの提案することを目指して，ボッチャおよびゴールボールを教材としたアダプテッド・スポーツ体験プログラムを実践的に研究することで，体験プログラムの効果や妥当性について検討を進めてきた．なお，当該プログラムで目指す学修課題及び期待される体験効果として，以下の 3 つを示していた．

- ① アダプテッド・スポーツの理解
- ② 新たな身体知への気づき
- ③ 障害観の変化

まず，アダプテッド・スポーツを取り入れた体験プログラムの作成にあたり，対象者の状況把握を行うことを目指して，16・20 歳の高専生を対象にアダプテッド・スポーツの経験，興味および関心，知識についてアンケートを行った（研究課題 1）．その結果，アダプテッド・スポーツの経験は全体で 12%程度であり，プログラムを構築する際には，アダプテッド・スポーツ未経験者を想定することが妥当であると考えられた．

次に 90 分 1 回のボッチャの実践から①アダプテッド・スポーツの理解への体験効果を確認した（研究課題 2）．その結果，ボッチャ体験を通じて，道具やルールが工夫されることにより「誰もがスポーツを楽しめること」および「誰とでも楽しむことができること」の理解，すなわち，アダプテッド・スポーツの理解への効果があったことが確認された．このことから，アダプテッド・スポーツの理解にボッチャが適していることが示唆された．

続いて 90 分複数回のゴールボールの実践から②新たな身体知への気づきへの効果，ならびに③障害観の変化への波及効果について検討した（研究課題 3）．その結果，複数回のゴールボールの体験により，新たな身体知に気づくことが確認された．さらに，実技後に講

義を行うことにより、「障害のある人がスポーツをすることは危ない」、「障害のある人と一緒にスポーツをするのは難しい」と思わなくなる等、スポーツ場面における障害観に望ましい変化に期待できることが示唆された。一方、90分1回で終えるプログラムは、対象者に怖いやできないといった否定的な印象を持たせる可能性が示唆された。

研究課題1・3を踏まえて、高等教育機関における教養教育としてのアダプテッド・スポーツプログラムを検討した（研究課題4）。その結果、①アダプテッド・スポーツの理解をねらいとしたボッチャ体験プログラムの学習概要、②新たな身体知に気づくことをねらいとしたゴールボール体験プログラムの学習概要、そして、両プログラムおよび講義も含めた教養教育としてのアダプテッド・スポーツプログラムの学習概要を示した。なお、③障害観の変化については、スポーツ場面における障害観への効果に期待できることが示唆された。一方、障害理解教育としては、本プログラムのみでは効果は限定的であり、障害に関する知識を習得する機会および障害者と関わる機会を設けた他のプログラムと併用する必要性が示唆された。

以上を踏まえて、高等教育機関における教養教育としての次のようなアダプテッド・スポーツプログラムを提案した。まず、ボッチャ体験プログラムでは、90分1回の体験にてアダプテッド・スポーツの理解、ルール理解、そしてボッチャの魅力の理解を目指す。内容はルール説明・練習・試合・講義で構成した。次にゴールボール体験プログラムでは、90分3回の体験にてルール理解、新たな身体知への気づき、そして見る役割、支える役割を含めたゴールボールの魅力の理解を目指す。内容は、1回目は簡易ルールの説明・基礎練習・ミニコートでの練習・試合、2回目以降は正式ルールの説明・基礎練習・フルコートでの練習・試合で構成した。最後に90分1回の講義では、アダプテッド・スポーツの概念について改めて学び、両体験プログラムでの気づきを踏まえてアダプテッド・スポーツの意義やスポーツ場面における障害について社会モデルの視点から考える機会を設ける。また自身のアダプテッド・スポーツへの意識や障害観についても考える機会を設ける。内容は、講義およびグループワーク（ディスカッション）にて構成した。

なお、提案するプログラムによる効果が得られた際には、高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説保健体育編体育編に示されている「生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続し、スポーツとの多様な関わり方を状況に応じて選択し、卒業後も継続して実践することができる」資質や能力の育成にも寄与することが期待できるだろう。

今後は、本研究で提案したプログラムの再現性や新たな課題について、実践と検討、そして修正を重ね続ける必要がある。また、障害理解も含めた教養教育としてのアダプテッド・スポーツプログラムの検討も社会的に必要である。

論文審査の要旨

本論文は、ボッチャおよびゴールボールを教材としたアダプテッド・スポーツ体験プログラムを実践的に研究することで、高等教育機関における教養教育としてのアダプテッド・スポーツプログラムを提案することであった。当該プログラムが目指す学修課題および期待される体験効果として、①アダプテッド・スポーツの理解、② 新たな身体知への気づき、③ 障害観の変化を仮定し、4つの研究課題が設定された。研究課題1は、アダプテッド・スポーツを取り入れた体験プログラムの作成にあたり、対象者の状況把握を行うために、16-20歳の高専生を対象にアダプテッド・スポーツの経験、興味および関心、知識についてアンケート調査を行った。その結果、本プログラムの構築においてはアダプテッド・スポーツ未経験者を想定する必要性を見出した。続いて、研究課題2では、90分1回のボッチャの実践から、①アダプテッド・スポーツの理解への体験効果を確認し、アダプテッド・スポーツの理解にボッチャが適していることを明らかにした。研究課題3では、90分複数回のゴールボールの実践から、②新たな身体知への気づきへの効果、ならびに③障害観の変化への波及効果について検討した。その結果、複数回のゴールボールの体験により、新たな身体知に気づくことが確認され、さらに実技後に講義を行うことで、スポーツ場面における障害観に望ましい変化が期待できることを明らかにした。最後に、研究課題4では、研究課題1-3を踏まえて、高等教育機関における教養教育としてのアダプテッド・スポーツプログラムを提案した。具体的には①アダプテッド・スポーツの理解をねらいとしたボッチャ体験プログラムの学習概要(90分1回)、②新たな身体知に気づくことをねらいとしたゴールボール体験プログラムの学習概要(90分3回の体験)、そしてスポーツ場面における障害観の理解を深めることをねらいとした講義(90分1回)も含めた教養教育としてのアダプテッド・スポーツプログラムの学習概要を提示した。